FUMIKO HAYASHI

林 芙美子

現代日本文学アルバム——13

JAPANESE MODERN LITERATURE IN PHOTOS

現代日本文学アルバム 13

林 芙美子

監修委員
川端康成
井上　靖

編集委員
足立巻一
奥野健男
尾崎秀樹
北　杜夫

学習研究社

現代日本文学アルバム
第13巻
林　芙美子
昭和49年6月1日　初版発行

発行人　古岡秀人
編集責任者　桜田　満
発行所　株式会社 学習研究社
東京都大田区上池台4丁目40番5号
郵便番号 145　振替 東京 142930
電話 東京 (03) 720－1111(大代表)
印刷・製本　図書印刷株式会社
製函　永井紙器印刷株式会社
本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙　特種製紙株式会社

＊この本に関するお問合せやミスなどがありましたら，
文書は，東京都大田区上池台4丁目40番5号(〒145)
学研　ユーザー・サービス部
現代日本文学アルバム係へ
電話は，東京 (03) 720－1111 または
東京 (03) 727－1600 へお願いします。

C 1974　Printed in Japan

目次 FUMIKO HAYASHI

目次

林芙美子文学へのいざない……5
林芙美子文学紀行／『放浪記』の根源を求めて…足立　巻一　69
林芙美子文学旅行ガイド……涌田　佑　101
林芙美子の素顔……117

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

林芙美子とその時代……和田　芳恵　181
林芙美子主要作品鑑賞小辞典……川副　国基　213
年譜……川副　国基　229
著作目録……川副　国基　237
主要参考文献……紅野　敏郎　239

写真（「林芙美子の素顔」の一部）
熱田優子
井上貞邦
井上佳子
今井修一
今村元市
大竹新助
川端康成
木曽季野
小林正雄
壺井繁治
林　忠彦
林　緑敏
宮田静盛
横田正知
和田芳恵
・
足立巻一（「林芙美子文学紀行」の一部）

資料提供
朝井柾善
今井静子
上田静栄
上刎　忠
大谷晃一
工藤　久
窪田稲雄
五代夏夫
小林行雄
田栗奎作
玉井政雄
中原雅夫
中山主膳
野村秀雄
浜崎幸勝
東田　鑑
平林たい子
深川賢郎
藤森栄一
真木八重子
松添素之
村上正啓
行實正利
吉本秋子
・
朝日新聞社
尾道短期大学
オリオンプレス
河出書房新社
共同通信社
産業経済新聞社
山陽新聞社
主婦の友社
新潮社
創元社
筑摩書房
中央公論社
中国新聞社
東峰書房
長崎新聞社
日本近代文学館
ノーボスチ通信社
文藝春秋
毎日新聞社
読売新聞社
六興出版社
・
ＮＨＫ
東宝
・
因島市・金蓮寺
因島市役所
因島市史料館
岡野屋旅館（天草・苓北町富岡）
尾道市役所観光課
尾道市役所市史編さん室
尾道城
尾道市立土堂小学校
尾道東高等学校
鹿児島市役所東桜島支所
上屋久町役場企画課
亀山八幡宮（下関市）
北九州市医師会
北九州市立小倉図書館
北九州市立門司図書館
北九州市若松区役所
神戸製鋼所門司工場
小西旅館（徳島・白地温泉）
佐世保市文化科学館
佐世保市立図書館
佐世保市立八幡小学校
下関市役所観光課
下関市立図書館
下関市立名池小学校
塵表閣（長野・上林温泉）
多賀神社（福岡・直方市）
東予市役所戸籍課（愛媛）
長崎市商工部観光課
長崎市立勝山小学校
長崎市立図書館
直方市石炭記念館
直方市立図書館
八王子市立郷土資料館
万昌院功運寺（東京・中野区）
（五十音順敬称略）

編集スタッフ
編集責任
桜田　満
編集担当
大和　浩
校正
須山康邦

写真
村松孝輔
大隅隆章
生井公男
矢島康次
成田牧雄
横田公入
岡沢克郎
吉川一彦
斎藤俊博

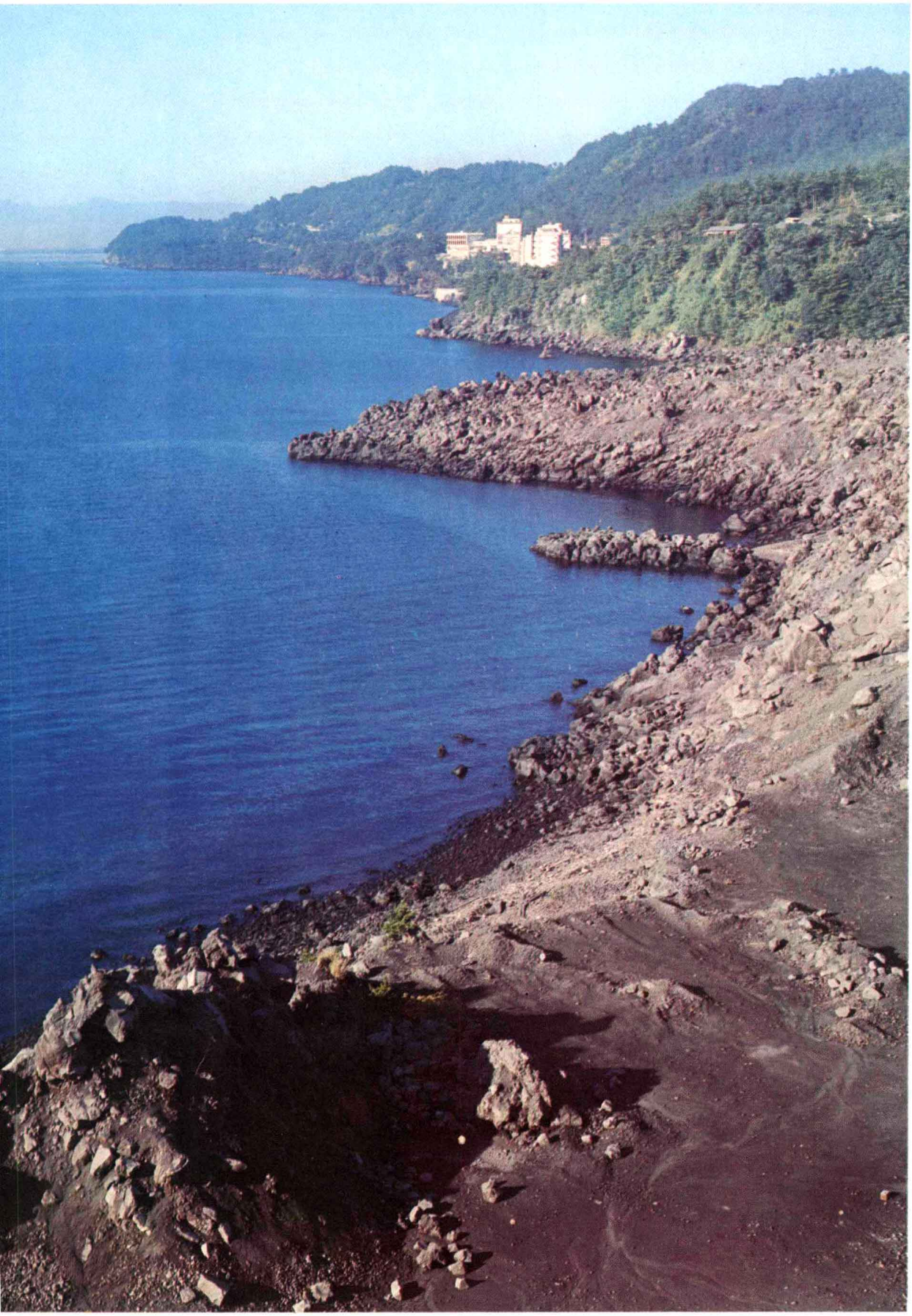
地図製作
玉木図版社

装幀　大川泰央

レイアウト　大川泰央

林芙美子文学へのいざない

尾道(おのみち)・千光寺本堂と，芙美子が6年余を過ごした尾道市街
（写真右は尾道水道をはさんで向島(むかいしま)にかかる尾道大橋）



放浪記…第一部…

私は北九州の或る小学校で、こんな歌を習った事があった。

更けゆく秋の夜　旅の空の
侘しき思ひに　一人なやむ
恋ひしや古里　なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。父は四国の伊予の人間で、太物の行商人であった。母は、九州の桜島の温泉宿の娘である。

（「放浪記」第一部・放浪記以前」）

下関市田中町・五穀神社境内の〝林芙美子生誕地〟碑(田中町自治会により昭和41年2月建立)

桜島・古里温泉の眺望　母林キクと実父宮田麻太郎が結ばれ，芙美子の原籍地。芙美子の文学碑がある▶

……母は他国者と一緒になったと云うので、鹿児島を追放されて父と落ちつき場所を求めたところは、山口県の下関と云う処であった。私が生れたのはその下関の町である。――故郷に入れられなかった両親を持つ私は、したがって旅が古里であった。それ故、宿命的に旅人である私は、この恋ひしや古里の歌を、随分侘しい気持ちで習ったものであった。

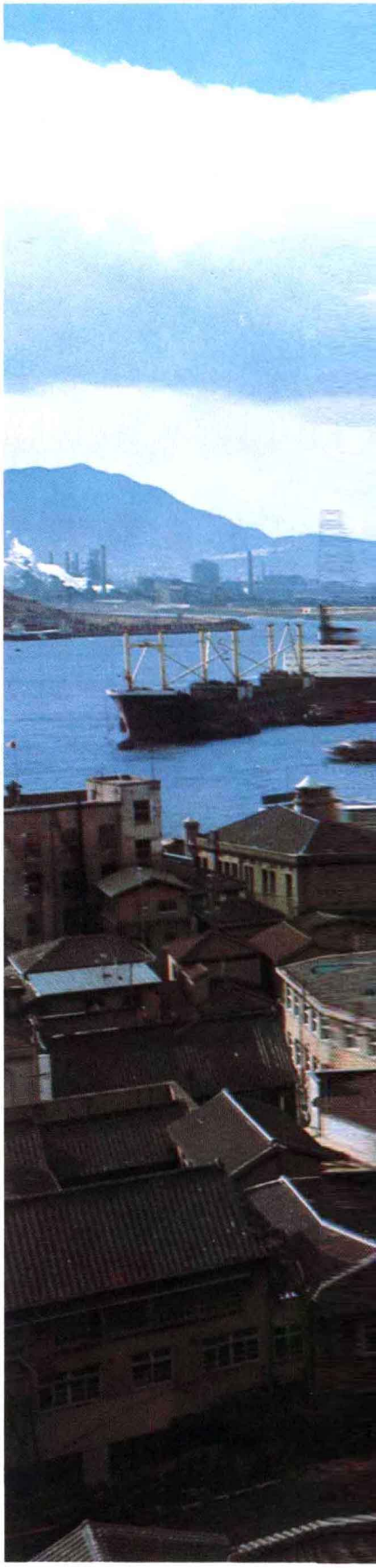
（「放浪記」第一部・放浪記以前）

「宿命的に旅人である」私は、下関、若松、長崎、直方で両親と生活するが、やがて尾道高女を卒業して単身上京する。生活のため、近松秋江家の女中、セルロイド玩具工場の女工、カフェーの女給…と、めまぐるしい職業遍歴と併行して岡本潤などのアナーキイな詩人と交わり、また新劇俳優田辺若男、詩人野村吉哉と傷つきながら愛の破局をくり返す。

上京後の貧困、食欲と性欲に苦悩する流転生活をクヌート・ハムスンの『飢え』の影響下に、大正十二年頃からノートに書きためられていた「歌日記」が原型である。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

長崎市勝山町・勝山小学校　芙美子は明治43年に入学したが，間もなく佐世保市・八幡女児尋常小学校に転校していった



北九州市若松区本町１丁目付近の町並みと洞海湾　実父宮田麻太郎は明治40年，せり店〝軍人屋〟若松本店を構え，繁昌させた（写真右寄り中央鉄筋あたり＝p.92参照）▶

――八つの時、私の幼い人生にも、暴風が吹きつけてきたのだ。若松で、呉服物の糶売をして、かなりの財産をつくっていた父は、長崎の沖の天草から逃げて来た浜と云う芸者を家に入れていた。雪の降る旧正月を最後として、私の母は、八つの私を連れて父の家を出てしまったのだ。若松と云うところは、渡し船に乗らなければ行けないところだと覚えている。（「放浪記」第一部・放浪記以前）

……私がはじめて小学校へはいったのは長崎であった。ざっこく屋と云う木賃宿から、その頃流行のモスリンの改良服と云うのをきせられて、南京町近くの小学校へ通って行った。それを振り出しにして、佐世保、久留米、下関、門司、戸畑、折尾と云った順に、四年の間に、七度も学校をかわって、私には親しい友達が一人も出来なかった。

（「放浪記」第一部・放浪記以前）

直方駅付近の町並み　当時の生活を芙美子は「このころの思い出は一生忘れることは出来ないのだ」とも記している

「お父つぁん、俺アもう、学校さ行きとうなかバイ……」

せっぱつまった思いで、私は小学校をやめてしまったのだ。私は学校へ行くのが厭になっていたのだ。それは丁度、直方の炭坑町に住んでいた私の十二の時であったろう。

「ふうちゃんにも、何か売らせましょうたいなあ……」遊ばせてはモッタイナイ年頃であった。私は学校をやめて行商をするようになったのだ。

（「放浪記」第一部・放浪記以前）

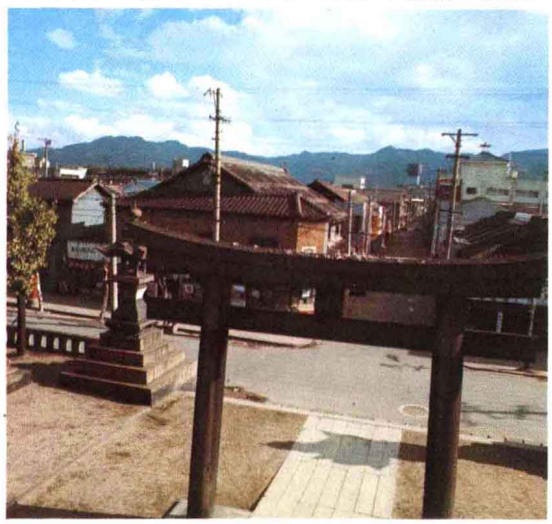
ほうろくのように焼けた暑い直方の町角に、そのころカチュウシャの絵看板が立つようになった。異人娘が、頭から毛布をかぶって、雪の降っている停車場で、汽車の窓を叩いている図である。すると間もなく、頭の真ん中を二つに分けたカチュウシャの髪が流行って来た。

カチュウシャ可愛や　別れの辛さ
せめて淡雪　とけぬ間に
神に願ひを　ララ　かけませうか

なつかしい唄である。この炭坑街にまたたく間に、このカチュウシャの唄は流行してしまった。ロシヤ女の純情な恋愛はよくわからなかったけれど、それでも、私は映画を見て来ると、非常にロマンチックな少女になってしまったのだ。浮かれ節（浪花節）より他に芝居小屋に連れて行ってもらえなかった私が、たった一人で隠れてカチュウシャの映画を毎日見

直方・多賀神社境内（春季・秋季日若祭が行なわれる）

▼多賀神社鳥居（かつて鷗外は付近の貝島邸に宿泊）



に行ったものであった。当分は、カチュウシャで夢心地であった。石油を買いに行く道の、白い夾竹桃の咲く広場で、町の子供達とカチュウシャごっこや、炭坑ごっこをして遊んだりもした。

（「放浪記」第一部・放浪記以前）

……母は多賀神社のそばでバナナの露店を開いていた。無数に駅からなだれて来る者は、坑夫の群である。一山いくらのバナナは割によく売れて行った。アンパンを売りさばいて母のそばへ籠を置くと、私はよく多賀神社へ遊びに行った。そして大勢の女や男達と一緒に、私も馬の銅像に祈願をこめた。いい事がありますように。——多賀さんの祭には、きまって雨が降る。多くの露店商人達は、駅のひさしや、多賀さんの境内を行ったり来たりして雨空を見上げていたものだった。

（「放浪記」第一部・放浪記以前）

遠賀川にかかる筑豊本線鉄橋　「黒崎からの帰り道，父と母と私は，大声で話しながら，軽い荷車を引いて，暗い遠賀川の堤防を歩いていた」折，二人の朝鮮人坑夫に金を無心される

◀芙美子が好きで，何度も訪れた東京・浅草雷門と仲見世

……間もなく、呼びに帰って来た義父と一緒に、私達三人は、直方を引きあげて、折尾行きの汽車に乗った。毎日あの道を歩いたのだ。汽車が遠賀川の鉄橋を越すと、堤にそった白い路が暮れそめていて、私の目に悲しくうつるのであった。白帆が一ツ川上へ登っている、なつかしい景色である。汽車の中では、金鎖や、指輪や、風船、絵本などを売る商人が、長い事しゃべくっていた。父は赤い硝子玉のはいった指輪を私に買ってくれたりした。

（「放浪記」第一部・放浪記以前）

（十二月×日）

浅草はいい処だ。

浅草はいつ来てもよいところだ……。テンポの早い灯の中をグルリ、グルリ、私は放浪のカチュウシャです。長いことクリームを塗らない顔は瀬戸物のように固くなって、安酒に酔った私は誰にもおそろしいものがない。ああ一人の酔いどれ女でございます。酒に酔えば泣きじょうご、痺れて手も足もばらばらになってしまいそうなこの気持ちのすさまじさ……酒でも呑まなければあんまり世間は馬鹿らしくて、まともな顔をしては通れない。あの人が外に女が出来たと云って、それがいったい何でしょう。真実は悲しいのだけれど、酒は広い世間を知らんと云う。町の灯がふっと切れて暗くなると、活動小屋の壁に歪んだ顔をくっつけて、荒さんだ顔を見ていると、ああああすから私は勉強をしようと思う。

（「放浪記」第一部）

金龍山
雷門
松下電器
老見仲
老見仲
老見仲
老見仲

鳴門海峡のうず潮　東京で疲れた芙美子は，母のいる徳島へ向かう

（十二月×日）

風が鳴る白い空だ！

冬のステキに冷たい海だ

狂人だってキリキリ舞ひをして

目のさめさうな大海原だ。

四国まで一本筋の航路だ。

あんまり昨日の空が青かったので、久し振りに、古里が恋しく、私は無理矢理に汽車に乗ってしまった。そうして今朝はもう鳴門の沖なのだ。

「お客さん！　御飯ぞなッ！」

誰もいない夜明けのデッキの上に、ささけた私の空想はやっぱり古里へ背いて都へ走っている。旅の古里ゆえ、別に錦を飾って帰る必要もないのだけれども、なぜか侘しい気持ちがいっぱいだった。（「放浪記」第一部）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com